白居易の古詩の押韻について

――「長恨歌」「琵琶行」――

西村　富美子

○

次の詩は、白居易が母陳氏の喪に服して、長安郊外の下邽にいた時の作である。服喪のため、政治の世界から完全に離れ無位無官の生活をしていた。四十歳ごろのことである。

先ず最初にこの詩を挙げたのは、詩の内容に関して何かを述べるためではなく、詩の型式つまり唐詩を作る際の規則を述べようとするための一つの例として、恣意的に選んだものである。

暮立　　暮れに立つ

黄昏獨立佛堂前　　黄昏独り立つ　仏堂の前　　○○●●●○◎
滿地槐花滿樹蟬　　満地の槐花　満樹の蟬　　●●●○●●◎
大抵四時心総苦　　大抵四時　心総べて苦しきも　　●●●○○●●
就中腸斷是秋天　　就中　腸断つは是れ秋天　　●○○●●○◎

※七言絶句。平起式、二四不同・二六対。
押韻は、前・蝉・天：下平一先（◎印）。

唐代から、従来の古（体）詩に対して、近（今）体詩が新たな詩の型式として作られるようになり、前者に比してかなり厳密な規則に束縛されるようになる。古詩に加えて、絶句・律詩の新型式が生まれ、一句の字数の制限も加わって、絶句・律詩ともに五言・七言の二種類があり、律詩には排律という型式も加わるようになった。

明代に編集され日本人に最も好まれた『唐詩選』も、五言古詩・七言古詩・五言律詩・五言排律・七言律詩・五言絶句・七言絶句の順に、六百五十首ほどの詩が収められている。残念ながら、『唐詩選』には白居易の詩は採られていず、初唐・盛唐の詩人たちの作品に偏っている。

いずれにしても、唐代の詩と先に述べた詩の規則とはどのような関係にあるのか、詩人はいろいろと繁雑な規則を厳守して詩を作っているのか、という点について改めて考えてみたいと常々考えてきた。

本稿ではまずその手始めとして、白居易の作品について述べてみたいというのが主旨である。

先に挙げた白居易の「暮立」の詩について簡単に詩の規則との関係を述べるならば、七言絶句、平起式の詩である。二四不同、二六対などの平仄も合っており、句ごとの対応も揃っている。押韻は七言絶句の規則どおり、一・二・四句の末字「前・蝉・天」で踏んでいる。下平一の先の韻である（ただし平水韻）。さらに詩の内容の構成に関わる「起・承・転・結」もみごとである。

詩の型式・内容の両面から見て、水準の域をこえている。また日本人にも好まれ、『和漢朗詠集』『千載佳句』や、『源氏物語』宇治十帖、蜻蛉の巻にも、薫るの君がこの詩の末句を口ずさむ場面が設定されて

いる。

この「暮立」の詩は、模範的な詩である。総体的に見て、白居易の詩は詩の規則を遵守するものが多いとは言える。すべての詩を調査したわけではないが、必要に応じて取りあげた詩を平仄・押韻などの規則に照合してみた結果、かなり忠実に作られているという印象を持っている。ただし規則どうりの作が優秀また傑作であるか、は別の問題であり、規則遵守は詩人の作品の評価の基準とはならないことは言うまでもない。

○

本稿では、初めに挙げた近体詩について論じるのではなく、同じ作者の作品だが「古詩」の作品を対象として、少し考えるところを述べてみることにした。ただし明白な結論、持論に導くだけの確信はなく、あくまで試論といった性質のものである。

とりあげる「古詩」は、「長恨歌」と「琵琶行」の二つの作品である。いずれも七言の古詩である。「長恨歌」は八百四十言、百二十句、「琵琶行」は六百十六言、八十八句から成り、両詩とも長篇だが、「琵琶行」は「長恨歌」の三分の二の長さである。「琵琶行」の方はなぜか白居易自らは序で「凡そ六百十二言、命けて琵琶行と曰う」と言っているのだが、七言型式で「六百十二言」というのは字も句も不足で合わない。原因については未だ解明されていず、白居易の思い違いだというのが現在の一致した結論である。なお白居易は「数」が好きというか自分の作品の中に頻繁に用いるのだが、他の作品にも「琵琶行」と同じ現象があり、数は好きだが数には強く無さそうだと思える。

近体詩では比較的忠実に詩のルールを守っている白居易だが、古詩については実はよく分からない。古詩に限定して論ずる人も少なく、古詩自体に、絶句ほどの厳密な規則は無く、偶数句における押韻、韻は近体詩と同じ一韻（到底）もあるが、自由に転韻をする。この二つが古詩に課された作詩上の規則である。

なぜ白居易の「古詩」を問題にするかについては、後に譲ることにして、まず「長恨歌」、次いで「琵琶行」を挙げていくことにする。

「長恨歌」の場合

「長恨歌」は四段落に分けて、述べていく。なお句末に●○の印があるのは、韻字が「平」の場合は○、韻字が「仄」の場合は●の意味である。また句末に①②などとあるのは、押韻による分節であり、分節を表すものとして句末に《|》の印を付した。

長恨歌

I 漢皇重色思傾國●　漢皇色を重んじて　傾国を思う
御宇多年求不得●　御宇多年　求むれども得ず
楊家有女初長成　楊家に女有り　初めて長成す
養在深閨人未識●　養われて深閨に在り　人未だ識らず
天生麗質難自棄▲　天生の麗質　自ずから棄て難く
一朝選在君王側●　一朝選ばれて　君王の側に在り
迴眸一笑百媚生　眸を迴らして一たび笑えば　百媚生じ
六宮粉黛無顏色●」①　六宮の粉黛　顏色無し
春寒賜浴華清池○　春寒くして浴を賜う　華清池
温泉水滑洗凝脂○　温泉水滑らかにして　凝脂を洗う
侍兒扶起嬌無力　侍児扶け起こせば　嬌として力無し
始是新承恩澤時○」②　始めて是れ新たに　恩沢を承くる時
雲鬢花顏金步搖○　雲鬢花顏　金歩揺
芙蓉帳暖度春宵○　芙蓉の帳暖かにして　春宵を度る
春宵苦短日高起　春宵は短きに苦しみ　日高くして起く
從此君王不早朝○」③　此れ従り君王は　早朝せず

承歡侍宴無閑暇●　歓を承け宴に侍りて　閑暇無く
春從春遊夜專夜●」④　春は春の遊びに従い　夜は夜を専らにす
後宮佳麗三千人○　後宮の佳麗　三千人
三千寵愛在一身○　三千の寵愛　一身に在り
金屋妝成嬌侍夜　金屋粧い成って　嬌として夜に侍し
玉樓宴罷醉和春○」⑤　玉楼宴罷んで　酔うて春に和す
姉妹弟兄皆列土●　姉妹弟兄　皆な土に列し
可憐光彩生門戸●　憐れむ可し　光彩の門戸に生ずるを
遂令天下父母心　遂に天下の父母の心をして
不重生男重生女●」⑥　男を生むを重んぜず女を生むを重んぜしむ
驪宮高處入青雲○　驪宮高き処　青雲に入り
仙樂風飄處處聞○」⑦　仙楽は風に飄って処処に聞こゆ
緩歌慢舞凝絲竹●　緩歌慢舞　糸竹を凝らし
盡日君王看不足●　尽日　君王看れども足らず
漁陽鞞鼓動地來　漁陽の鞞鼓　地を動かして来たり
驚破霓裳羽衣曲●」⑧　驚破す　霓裳羽衣の曲

①國・得・識・側・色…入声十三職。②池・脂・時・…上平四支。③搖・宵・朝…下平二蕭。④暇・夜…去声二十二禡。⑤人・身・春…上平十一真。⑥※ア土・戸…上声七麌、女…上声六語。⑦雲・聞…上平十二文。⑧竹…入声一屋、足・曲…入声二沃。

Ⅰは、玄宗皇帝と楊貴妃の栄華と幸福の最絶頂を描写している。三十二句から成っているが、①の入内以前の楊貴妃については、事実と虚構が交錯している。②の華清池はいまもなお残る史実、⑥楊貴妃の七光りを得た一族の栄耀栄華については、歴史に記されている、楊国忠・韓国夫人・虢国夫人・秦国夫人など。⑧の安禄山の叛乱は歴史に記されている。Ⅰは史実をかなり忠実に用いている。

Ⅱ九重城闕煙塵生○　九重の城闕　煙塵生じ
千乘萬騎西南行○」①　千乗万騎　西南に行く
翠華搖搖行復止●　翠華は搖搖として　行きて復た止まり
西出都門百餘里●　西のかた都門を出てより　百余里
六軍不發無奈何　六軍発せず　奈何ともする無く
宛轉蛾眉馬前死●」②　宛転たる蛾眉　馬前に死す
花鈿委地無人收○　花鈿は地に委せて　人の収むる無く
翠翹金雀玉搔頭○　翠翹金雀　玉搔頭
君王掩面救不得　君王は面を掩いて　救い得ず
迴看血淚相和流○」③　迴り看て　血涙相和して流る
黃埃散漫風蕭索●　黄埃散漫　風蕭索たり
雲棧縈紆登劍閣●　雲棧縈紆して　剣閣に登る
峨眉山下少人行　峨眉山下　人行少に
旌旗無光日色薄●」④　旌旗光り無く　日色薄し
蜀江水碧蜀山青○　蜀江水は碧に　蜀山は青く
聖主朝朝暮暮情○　聖主　朝朝暮暮の情
行宮見月傷心色　行宮に月を見ては　傷心の色
夜雨聞鈴腸斷聲○」⑤　夜雨に鈴を聞けば　腸断の声
天旋日轉迴龍馭●　天旋り日転じて　竜馭を迴らし
到此躊躇不能去●　此に到り　躊躇して去る能わず
馬嵬坡下泥土中　馬嵬坡の下　泥土の中
不見玉顏空死處●」⑥　玉顔を見ず　空しく死する処
君臣相顧盡霑衣○　君臣相顧りみて　尽く衣を霑し
東望都門信馬歸○」⑦　東のかた都門を望み　馬に信せて帰る

①生・行…下平八庚。②止・里・死…上声四紙。③収・頭・流…下平十一尤。④索・閣・薄…入声十薬。⑤※イ青…下平九青、情・聲…下平八庚。⑥馭・去・處…去声六御。⑦衣・歸…上平五微。

内戦の勃発による玄宗と楊貴妃の都落ちは、史実に描かれる。②③の楊貴妃の死はあっけないほどシンプルな描写であり、⑥の都への復

帰の道中は史実には詳細に玄宗の落胆ぶりを載せるが、「長恨歌」ではさらりと述べている。ⅡはⅠとともに史実をもとにしており、Ⅰの②③④⑤⑦⑧はⅡの②③④⑤⑥と対照的であり、幸福の絶頂と不幸のどん底とを対比させている。

Ⅲ歸來池苑皆依舊●　帰り来れば　池苑皆な旧に依る
太液芙蓉未央柳●」①　太液の芙蓉　未央の柳
芙蓉如面柳如眉○　芙蓉は面の如し　柳は眉の如し
對此如何不淚垂○　此に対して　如何ぞ涙を垂れざらん
春風桃李花開夜　春風桃李　花開く夜
秋雨梧桐葉落時○」②　秋雨梧桐　葉落つる時
西宮南苑多秋草●　西宮南苑　秋草多く
宮葉滿階紅不掃●　宮葉階に満ちて　紅掃わず
梨園弟子白髮新　梨園の弟子　白髮新たに
椒房阿監青蛾老●」③　椒房の阿監　青蛾老いたり
夕殿螢飛思悄然○　夕殿に蛍飛んで　思い悄然たり
孤燈挑盡未成眠○　孤灯挑げ尽くして　未だ眠りを成さず
遲遲鐘鼓初長夜　遅遅たる鐘鼓　初めて長き夜
耿耿星河欲曙天○」④　耿耿たる星河　曙けなんと欲する天
鴛鴦瓦冷霜華重●　鴛鴦の瓦は冷かにして　霜華重く
翡翠衾寒誰與共●　翡翠の衾は寒くして　誰と共にせん
悠悠生死別經年　悠悠たる生死　別れて年を経るも
魂魄不曾來入夢●」⑤　魂魄　曽て来たりて夢にだも入らず

①舊：去声二十六宥、柳：上声二十五有。②眉・垂・時：上平四支。③草・掃・老：上声十九皓。④然・眠・天：下平一先。⑤重・共：去声二宋、夢：去声一送。

Ⅲは都に帰った玄宗の孤独なようすを描き、③の梨園の弟子が史実によるのを別として、大半が虚構であり、玄宗の悲痛な心情また生活を描いた回想シーンであり、⑤では生死を越えた魂魄の世界を予想させて、次のⅣへの導入部にしている。

Ⅳ臨邛道士鴻都客●　臨邛の道士　鴻都の客
能以精誠致魂魄●　能く精誠を以て　魂魄を致す
爲感君王展轉思　君王が展転の思いに感ずるがために
遂教方士慇懃覓●」①　遂に方士をして　慇懃に覓めしむ
排空馭氣奔如電●　空を排き気を馭りて　奔ること電の如く
昇天入地求之遍●　天に昇り地に入りて　之を求むること遍し
上窮碧落下黃泉　上は碧落を窮め　下は黄泉を
兩處茫茫皆不見●」②　両処茫茫として　皆見えず
忽聞海上有仙山○　忽ち聞く　海上に仙山有り
山在虛無縹緲間○」③　山は虚無縹緲の間に在りと
樓閣玲瓏五雲起●　楼閣は玲瓏として　五雲起こり
其中綽約多仙子●　其の中に　綽約たる仙子多し
中有一人字太眞　中に一人有り　字は太真
雲膚花貌參差是●」④　雲膚花貌　参差として是なり
金闕西廂叩玉扃○　金闕の西廂　玉扃を叩き
轉教小玉報雙成○　転じて　小玉をして双成に報ぜしむ
聞道漢家天子使　漢家の天子の使いなりと道うを聞き
九華帳裏夢魂驚○」⑤　九華帳裏　夢魂驚く
攬衣推枕起徘徊○　衣を攬り枕を推し　起ちて徘徊し
珠箔銀屏邐迤開○　珠箔銀屏　邐迤として開く
雲鬢半偏新睡覺　雲鬢半ば偏りて　新たに睡りより覚め
花冠不整下堂來○」⑥　花冠整えず　堂を下り来る
風吹仙袂飄飄舉●　風は仙袂を吹いて　飄飄として挙がり
猶似霓裳羽衣舞●　猶お霓裳羽衣の舞に似たり
玉容寂寞淚闌干　玉容寂寞　涙闌干
梨花一枝春帶雨●」⑦　梨花一枝　春　雨を帯ぶ
含情凝睇謝君王○　情を含み睇を凝らして　君王に謝す

一別音容兩渺茫○　一別　音容は両つながら渺茫
昭陽殿裏恩愛絶　昭陽殿裏　恩愛絶え
蓬莱宮中日月長○」⑧　蓬莱宮中　日月長し
迴頭下望人寰處●　頭を迴らして　下のかた人寰を望む処
不見長安見塵霧●　長安を見ずして　塵霧を見る
唯將舊物表深情　唯だ　旧物を将て深情を表わす
鈿合金釵寄將去●」⑨　鈿合金釵　寄せ将て去らしむ
釵留一股合一扇●　釵は一股を留め　合は一扇
釵擘黄金合分鈿●　釵は黄金を擘き　合は鈿を分かつ
但令心似金鈿堅　但だ心をして　金鈿の堅きに似しむれば
天上人間會相見●」⑩　天上人間　会ず相見ん
臨別殷勤重寄詞○　別れに臨んで　殷勤に重ねて詞を寄す
詞中有誓兩心知○　詞の中に誓い有り　両心のみ知る
七月七日長生殿　七月七日　長生殿
夜半無人私語時○　夜半人無く　私語の時
在天願作比翼鳥　天に在りては　願わくは比翼の鳥となり
在地願爲連理枝○　地に在りては　願わくは連理の枝と為らん
天長地久有時盡　天長地久　時有りて尽きんも
此恨綿綿無絶期○」⑪　此の恨　綿綿として絶ゆる期無し

①客・魄：入声十一陌、覓：入声十二錫。　②電・遍・見：去声十七霰。　③山・間：上平十五刪。　④起・子・是：上声四紙。　⑤※イ扃：下平九青、成・驚：下平八庚。　⑥徊・開・來：上平十灰。　⑦※ア舉：上声六語、舞・雨：上声七麌。　⑧王・茫・長：下平七陽。　⑨處・去：去声六御、霧：去声七遇。　⑩扇・鈿・見：去声十七霰。　⑪詞・知・時・枝・期：上平四支。

Ⅳは虚構というより、空想・幻想の世界への飛躍であり、「長恨歌」の中で最も中心をなす山場を構成している。人間界から外の世界へと楊貴妃の「魂」を求めて変幻自在に捜索する。方士の努力の甲斐あって、仙界で仙女となって生活する楊貴妃に再会、証拠の品と誓詞、すべてがバーチャルにも関わらず、この最後の楊貴妃の姿と言葉を強く印象づけて「長恨歌」は終焉を告げ、後に残るは永遠に消えることのない「恨」だと白居易は結ぶ。このⅣは四十六句もあり、やはり「長恨歌」はこのⅣの世界の構築と表現に最も力を注いだのではないだろうか。

前半のⅠ・Ⅱは、現実の世界、歴史的事実を中心にし、後半のⅢ・Ⅳは現実の世界を離れて、虚構によって霊魂の世界に飛躍させ玄宗と楊貴妃の愛を異次元の世界に昇華させたのである。

「長恨歌」について簡単に内容の解説をしたが、次に「古詩」との関連について述べる。押韻は、それぞれの段落の後に、①また②として韻字を記した。いずれも平水韻によるものである。

韻字について、「古詩」には「通押」という押韻の仕方がある。たとえば、Ⅰの⑥は、「土・戸」が上声七麌、「女」が上声六語であり、この二つの韻、上声七麌と六語は通押であるという。いわゆる「同用」とは異なるもので、「古詩」のみに許される押韻なのである。

かつて白居易のこの「長恨歌」の注釈をしていて、押韻にもふれなければならないことがあり、小川環樹先生に教えを乞うたところ、事もなげに「通押」だと答えられた。当時はその意味が分からず混乱したのだが、今にして思えば緩やかな「古詩」の規則には、マニュアルには記載されていなくとも幾つかの事例から、押韻の規則が見えて来ることがある。「通押」はそうしたことから生まれた「古詩」の規則なのである。当時の知識の容量ではとても事例共通の規則などは発見できず理解のできないことであった。あまりにも遅すぎた理解力の到達であった。後のⅣの⑦に、「舉」が上声六語、「舞・雨」が上声七麌で、先と同じように上声六語と上声七麌は「通押」なのである。

押韻には、「平」と「仄」の二つの種類がある。この「平」「仄」の韻には意味があるのではなかろうか。たとえば「長恨歌」の冒頭八句

は「仄」韻で始まり、続く八句は「平」韻である。またⅣの仙界では始めは「仄」韻が続く。そして終わり近く⑨⑩の八句は「仄」韻で、最終の⑪の八句は「平」韻である。そして最初の①～③の十六句と、最終の⑨⑩⑪の十六句とは、「仄」・「平」の韻がぴったり呼応している。

「通押」の例は、Ⅱの⑤とⅣの⑤にもある。Ⅱの⑤の「青」は下平九青、「情・聲」は下平八庚で、Ⅳの⑤の「扃」は下平九青、「成・驚」は下平八庚である。これも下平九青と八庚とは「通押」の押韻なのである。

「琵琶行」の場合

次に「琵琶行」について、幾つか指摘をする前に、「琵琶行」の内容を順に沿って簡単に述べておきたい。「琵琶行」は、半ばを史実、半ばを虚構で作られた「長恨歌」とは異なり、実話をもとにしている。また作られた時の環境に大きな隔たりがある。それと「琵琶行」には序があり、序には作られた日時とともに制作の事情を述べている。その事情とは白居易が左遷された潯陽で、船中から聞こえる京都風の琵琶の音に聞き惚れ、琵琶の演奏を聞くことを所望する。二人の身の上に共通のものを感じ、女のために「琵琶行」の詩を贈ったのである。

琵琶行

Ⅰ潯陽江頭夜送客●　潯陽江頭　夜客を送れば
楓葉荻花秋索索●」①　楓葉荻花　秋索索たり
主人下馬客在船○　主人は馬より下り　客は船に在り
舉酒欲飲無管絃○」②　酒を挙げて飲まんと欲するに　管絃無し
醉不成歡慘將別●　酔うて歓を成さず慘として将に別れんとす
別時茫茫江浸月●　別るる時　茫茫として江は月を浸す
忽聞水上琵琶聲　忽ち聞く　水上琵琶の声
主人忘歸客不發●」③　主人は帰るを忘れ　客は発せず
①客：入声十一陌、索：入声十薬。　②船・絃：下平一先。
③※ウ別：入声九屑、月・發：入声六月。

旅立つ人を送る潯陽江の秋の渡し場の状景をまず描いている。最初の八句は、二・二・四句と転韻する。

Ⅱ尋聲暗問彈者誰○　声を尋ねて暗に問う　弾く者は誰ぞと
琵琶聲停欲語遲○」①　琵琶の声は停み　語らんと欲して遅し
移船相近邀相見●　船を移して相い近づけ　邀えて相見る
添酒迴燈重開宴●　酒を添え灯を迴らし　重ねて宴を開く
千呼萬喚始出來　千呼万喚　始めて出で来たる
猶抱琵琶半遮面●」②　猶お琵琶を抱きて　半ば面を遮る
①誰・遲：上平四支。　②見・宴・面：去聲十七霰。

旅立とうとする人を送る時、酒の席に音楽が無いのでもの足りず、ふと川面に流れる琵琶の音を聞いて、そのあるじをやっと尋ねあてた。

Ⅲ轉軸撥絃三兩聲○　軸を転じ絃を撥いて　三両声
未成曲調先有情○」①　未だ曲調を成さざるに　先ず情有り
絃絃掩抑聲聲思●　絃絃掩抑して　声声に思い
似訴平生不得意●　平生　意を得ざるを訴うるに似たり
低眉信手續續彈　眉を低れ手に信せて　続続と弾き
説盡心中無限事●」②　説き尽くす　心中無限の事
①聲・情：下平八庚。　②思・意・事：去声四寘。

琵琶の演奏がはじまり、演奏者の心がこもっているのを、白居易は聴きとる。

Ⅳ輕攏慢撚抹復挑○　軽攏慢撚　抹復た挑
初爲霓裳後綠腰○」①　初めは霓裳を為し　後は緑腰
大絃嘈嘈如急雨●　絃は嘈嘈として　急雨の如く
小絃切切如私語●」②　小絃は切切として　私語の如し

嘈嘈切切錯雜彈○	嘈嘈切切　錯雜して弾き	
大珠小珠落玉盤○	大珠小珠　玉盤に落つ	
間關鶯語花底滑	間関たる鶯語　花底に滑らかに	
幽咽泉流冰下難○」③	幽咽せる泉流　冰下に難めり	
冰泉冷澀絃凝絶●	冰泉は冷渋して　絃は凝絶し	
凝絶不通聲暫歇●」④	凝絶して通ぜず　声暫らく歇む	
別有幽愁暗恨生○	別に幽愁と暗恨の生ずる有り	
此時無聲勝有聲○	此の時　声無きは声有るに勝る	
銀瓶乍破水漿迸	銀瓶乍ち破れて　水漿迸り	
鐵騎突出刀槍鳴○」⑤	鉄騎突出して　刀槍鳴る	
曲終收撥當心畫●	曲終わり撥を収めて　心に当てて画く	
四絃一聲如裂帛●	四絃の一声　裂帛の如し	
東船西舫悄無言	東船西舫　悄として言無く	
唯見江心秋月白●」⑥	唯見る　江心に秋月の白きを	

①挑・腰：下平二蕭。　②※ア雨：上声七麌、語：上声六語。　③弾・盤・難：上平十四寒。　④※ウ絶：入声九屑、歇：入声六月。　⑤生・聲・鳴：下平八庚。　⑥畫・帛・白：入声十一陌。

演奏が本格的にはじまり、琵琶の音の変化が述べられて演奏が終わる。

Ⅴ沈吟放撥插絃中○	沈吟し撥を放きて　絃中に挿み	
整頓衣裳起斂容○」①	衣裳を整頓して　起ちて容を斂む	
自言本是京城女●	自ら言う　本は是れ京城の女	
家在蝦蟇陵下住●	家は蝦蟇陵下に在りて住む	
十三學得琵琶成	十三にして　琵琶を学び得て成り	
名屬教坊第一部●」②	名は教坊の第一部に属す	
曲罷曾教善才伏●	曲罷わりて　曾て善才をして伏せしめ	
粧成每被秋娘妬●	粧い成りて　毎に秋娘に妬まる	
五陵年少爭纏頭	五陵の年少　爭うて纏頭し	
一曲紅綃不知數●」③	一曲の紅綃　数を知らず	
鈿頭雲篦繫節碎●	鈿頭の雲篦　節を撃ちて砕け	
血色羅裙翻酒污●」④	血色の羅裙　酒を翻えして汚る	
今年歡笑復明年	今年の歓笑　復た明年	
秋月春風等閑度●	秋月春風　等閑に度る	
弟走從軍阿姨死●	弟は走りて軍に従い　阿姨は死し	
暮去朝來顏色故●」⑤	暮去り朝来りて　顔色故る	
門前冷落鞍馬稀	門前冷落して　鞍馬稀なり	
老大嫁作商人婦●	老大嫁して　商人の婦と作る	
商人重利輕別離	商人は利を重んじて　別離を軽んじ	
前月浮梁買茶去●」⑥	前月　浮梁に茶を買い去る	
去來江口守空船○	江口に去来して　空船を守る	
遶船月明江水寒○	船を遶る月明に江水寒し	
夜深忽夢少年事	夜深けて忽ち夢む　少年の事	
夢啼妝淚紅闌干○」⑦	夢に啼けば　粧涙は紅くして闌干たり	

①中：上平一東、容：上平二冬。　②女：去声六御、住：去声七遇、部：上声七麌。　③伏：入声一屋、妬・數：去声七遇。　④碎：去声十一隊、汚：去声七遇。　⑤度・故：去声七遇。死：上声四紙。　⑥婦：上声二十五有。去：去声六御。　⑦船：下平一先、寒・干：上平十四寒。

女の身の上ばなし。前半生の全盛を誇った幸福な時代の話。

Ⅵ我聞琵琶已歎息●	我は琵琶を聞いて　已に嘆息し	
又聞此語重唧唧●	又た此の語を聞きて　重ねて唧唧たり	
同是天涯淪落人	同じく是れ天涯淪落の人	
相逢何必曾相識●」①	相逢う　何ぞ必ずしも曾て相識なるべき	

①息・唧・識：入声十三職。

女の身の上ばなし。後半生の女の晩年の落魄、おちぶれうらぶれた

ようす。

Ⅶ我從去年辭帝京○　我　去年帝京を辞して従り
謫居臥病潯陽城○　謫居して病いに臥す　潯陽城
潯陽小處無音樂　潯陽は小処にして　音楽無し
終歳不聞絲竹聲○　終歳　糸竹の声を聞かず
住近湓江地低濕　住まいは湓江に近くして　地は低湿
黄蘆苦竹遶宅生○　黄蘆苦竹　宅を遶りて生ず
其間旦暮聞何物　其の間旦暮　何物をか聞く
杜鵑啼血猿哀鳴○　杜鵑は血に啼き　猿は哀しく鳴く
春江花朝秋月夜　春江の花朝　秋月の夜
往往取酒還獨傾○　往往酒を取りて　還た独り傾く
豈無山歌與村笛　豈に　山歌と村笛と無からんや
嘔啞嘲哳難爲聽○　嘔啞嘲哳　聴くを為し難し
今夜聞君琵琶語　今夜　君が琵琶の語を聞く
如聽仙樂耳暫明○　仙楽を聴くが如く　耳暫らく明かなり
莫辭更坐彈一曲　辞する莫かれ　更に坐して一曲を弾くことを
爲君翻作琵琶行○」①　君が為に　翻えして琵琶行を作らん
①※イ京・城・聲・生・鳴・傾・明・行…下平八庚、聽…下平九青。

女の身の上話を聞いた作者の感慨をうたう。

Ⅷ感我此言良久立●　我が此の言に感じて　良や久しく立ち
却坐促絃絃轉急●　坐に却りて絃を促むれば　絃　転た急なり
凄凄不似向前聲　凄凄として　向前の声に似ず
滿座重聞皆掩泣●　満座重ねて聞き　皆な泣を掩う
座中泣下誰最多　座中泣下ること　誰か最も多き
江州司馬青衫濕●」①　江州の司馬　青衫湿う
①立・急・泣・濕…入声十四緝。

現在の詩人の心境を述懐する。

Ⅰの③の「別」は入声九屑、「月・發」は入声六月。入声九屑と入声六月とは「通押」である。Ⅳの④の「絶」は入声九屑、「歇」は入声六月。Ⅰの③と同様に「通押」である。Ⅳの②の「雨」は上声七麌、「語」は上声六語。上声七麌と上声六語とは「通押」である。同様の「通押」は「長恨歌」にも二度使用されている。Ⅶの①の「京・城・聲・生・鳴・傾・明・行」は、下平八庚。「聽」は下平九青。下平八庚と下平青とは「通押」。この「通押」は、「長恨歌」にも二度使用されている。

これらの「古詩」に見られる事例の収集照合によって、「古詩」における「通押」の規則がある程度明らかになっていくように思える。

また「長恨歌」で述べた「平」と「仄」の韻の使用には、作者の特別の意図が作用しているようである。「琵琶行」のⅤの①から⑥までは「仄」韻が使われている。Ⅶの①の十六句は「平」韻で通している。Ⅴは琵琶の演奏者の浮沈の激しかった過去の生活、Ⅶは都から遠方の左遷の地で思いがけず都を思い出させる琵琶の音に出会えた喜びを表現している。「仄」「平」の韻は内容との関係を推測させるものではないだろうか。

○

先に挙げた「長恨歌」は、白居易三十五歳の作であり、最終の官吏の試験に及第して、長安郊外の盩厔県の県尉として赴任した時であり、将来の政界での活躍に希望を抱いていた。「琵琶行」は、「長恨歌」の十年後に作られた詩である。白居易としては不本意な左遷の地、江州で作られたものであり、心情的にこの二つの作品は両極端ともいえる背景がある。

そうした精神的な感情は絶句に比べて長い「古詩」の型式のほうが適しているのかも知れない。「古詩」の内容と規則とは何か相関関係

をもっているのではないか。この推論をいま一歩前進させるためには、さらに多くの数の詩について調査をしなければならない。

白居易が作る近体詩は、前述したようにかなり規則に従っている。「古詩」を作る際にもその姿勢は守られているのではないかというのが、「古詩」を考えるにあたって「長恨歌」と「琵琶行」を選んだ最大の理由である。

（本学教授）